

浄土

monthly
JODO
1996・3



1996 3 March



咲いたら、幸せ。

楽しい、嬉しい。

ちょっと切ない、なつかしい。

いろんな話をしたり、聞いたり。

そんな何気ないことが、人と人との
固い絆の第一歩。

それぞれの人の、それぞれのお話に

花を咲かせるお手伝い。

安い市外電話の、0088です。

日本を楽しくする電話

0088

お問い合わせ・お申し込みは、日本テレコムお客様センターまでお気軽に。



0088-82 (無料)

または 0120-0088-82

●受付時間 9:00～23:00 (年中無休)

台湾の寺院を巡る

—その三—

台湾の民間信仰の中でも、もっともポピュラーなのが、海の神様の「媽祖（マソ）」と、疫病の神様の「王爺」。王爺は病気を取り除き、健康を守ってくれるもの。媽祖は16世紀の後半、大陸からたくさんの人々が台湾海峡を渡ってきたときに海難除けの神様として信仰を集めていたが、いまでは現世利益もかなえてくれる万能の神となり、全島に約380もの廟をもっている。媽祖は建隆元年（960年）に福建省で産まれた超能力少女で、多くの奇蹟を起こしたという。

写真撮影・長谷川 章

大天后宮（台南）▼人々の奉納した媽祖像が並ぶ



吳鳳廟 (中埔)



朝天宮 (北港) ▲媽祖像

媽祖廟

台湾の南部に嘉義市がある。町のすぐ南に北回歸線の標塔が立ち、ここから南は熱帯圏になる。この嘉義市の西22キロに北港という町がある。町の中心にある「朝天宮」は、1694年に立てられた台湾本島最古の媽祖廟の一つ。年間約百万人もの参拝客が台湾各地から訪れるが、特に旧正月から媽祖の誕生日(旧暦3月23日)までに25〜30万人の参詣客が押し寄せる媽祖廟の総本山なのだ。本尊のほかに、媽祖の分身七尊があるが、誕生日をすぎると、神は台湾各地にちらばる廟に出向き、本山には年末になるまで帰れないほど人気がある。台湾にある寺廟の約3割が媽祖廟というのだから、数の上からも、そう簡単には帰れそうもない。

これほど厚い信仰を受ける媽祖は、960年(宋の時代)、福建省に産まれ、幼いころから未来を予知する力を持った、いまでいう超能力少女であった。27歳で短かい一生を終えたが、父や兄をはじめ、数多くの海難事故を告げて人々を救ってきた。それが海難よけの神、航海の守護女神として祀られるようになり、大陸から台湾海峡を渡ってきた人びとに根強く定着したのだった。

今では全能の神として信仰されており、なかには、あまりに厚い信仰心から、小さな漁船で媽祖の故郷詣でを図る信者も現れるという。

城隍廟 (新竹)



▼お供え物



大仙寺 (台中) ■尼寺



吳鳳廟

はるかに玉山（新高山）をはじめとする3千メートル級の高山が連なる中央山脈が南北に続く。その前山である阿里山は桧の原生林が広がる国立公園。かつては森林鉄道によって桧が切り出され、明治神宮の大鳥居も、ここから運び出したものだ。

嘉義市から東へ約10キロ、平野から丘陵地帯に入るところに「吳鳳廟」がある。廟の前には、この地方の名物である蓮の実などを売る屋台が並ぶ。緑に囲まれた廟の中央には、ほかの廟では見られない肖像画が飾られている。後方は吳鳳の偉業を伝える記念館の様相。

吳鳳は阿里山周辺に住む先住民族に師として慕われていた人物だった。吳鳳は彼らの好戦的な習慣をやめさせたく、説得を続けたが受け入れられず、自らの命を賭して改めさせた。「殺身成仁（身を捨てて仁をなす）」——これによって多くの人々の命を救った、とされる有徳の人物だったという。

この物語は、かつては台湾の小学校の教科書にも載せていたもののだが、近年、これは全くの作り話で真実ではない、と主張する声が強まり、物議をかもしている。しかし、廟を参拝する人々は絶えることはない。



龍山寺
(台北)

▲最も奥にまつられている媽祖像



彰化大佛



龍山寺 (鹿港)

▲台湾で一番古いお寺

浄土

1996/3月号

目次



カラーグラビア	写真=長谷川 章	3
法然上人の心を探る	藤堂恭俊台	8
信心とは何か—現代の信心	養老孟司	14
法然上人と私	斎藤耕善	22
表紙は語る 野草・花暦	石井敏之	29
魅せられて映画に	丸林久信	30
外国で生活して	川口善行	38
コラム		45
彼岸会法話	大室了皓	46
蕎麦屋のある町	藤木芳清	52
Jフォーラム		61
事務局便り		68
編集後記		70

表紙題字=浄土門主 中村康隆猥下

表紙撮影=石井敏之

アートディレクション=近藤十四郎

巻頭連載

因果応報を解く

——法然上人の心を探る（最終回）——

大本山増上寺法主

藤堂恭俊
台下

中学生のころ、水は「 H_2O 」であると教えられた。汗を滝のように流し、カラカラに乾ききった喉を癒すために飲む水は、あまい冷たい水であって、決して「 H_2O 」の水ではない。その水も近ごろは煮沸して飲んだ方が安全である、といわれるようになりつつある。まことに淋しくも面倒なことである。日本の誇りであった山紫水明も、自然界に対する人為的な破壊や、いろいろ汚染物質によって汚されたりして、いわゆる複合汚染の結果、店舗にならべられた「○名水」と銘の打たれた瓶やパック入りの自然水を、選び買い求めざるを得なくなってきた。

水と言えば空気であるが、その空気も水と同じように、私たちが生きるために与えられている。その空気も水に劣らず汚染を進めている。名水のようなパック入りの空気が市販されている、と聞いたことがないだけに、水よりも対処しにくいのであろう。ともかく生活が便利になり、快適で速度化が進むのに比例して自然界は荒される。人と自然界とが調和をたもった営みが失われてゆく

ことに、一抹の不安を募らせる昨今である。私のような老人は先が短いから我慢できても、これから生まれてくる孫や曾孫たちが、さらに濃度をたかめた汚染社会に生きてゆかねばならないと思うと、可哀想な気がしてならない。

去年の晩秋のころ、手にした夕刊紙をひろげると、「木炭が変える畑の水と土」(朝日新聞)というタイトルが目のなかに入ってきたので、心ひかれるままに読み始めた。すると「木炭は水質を浄化するはたらきがある」こと、「木炭を畑に入れると成長の速度、収穫時期の延長」などが指摘されてあった。水質の浄化については、生活排水による汚染が農業用水を茶色に濁したので、河川に木炭を沈めることによつて水は澄み、悪臭は消え、水質の浄化に役立ったというのである。現今、千曲川の支流が流れる長野県戸倉町や、東京都日野市などの二十ヶ所で、木炭による水質浄化を実施しているという。また「ハウレンソウ」の成長速度が三週間で約一・五倍の差ができた、「キュウリ」の収穫期間が

一ヶ月延びた、「メロン」の一茎に二個の実がつき、糖度も二、三度上がった、という成果のあることを伝えていた。一読してただもの識りになっただけでなく、いろいろ考えさせられることが多かった。

人間の心は、汚染された濁り水にたとえられるほど、人間の性（結使・煩惱）によって汚染されている。この心の汚染は南無阿弥陀仏と阿弥陀仏のみ名を呼び、となえる称名念仏によって浄化される。このように阿弥陀仏の名号には、あたかも浄化のはたらきを持つ木炭に匹敵する働きがある。法然上人は名号を木炭ではなく、浄摩尼珠という珠にたとえて、浄化のはたらきあることを示されている。かの『十二箇条の問答』のなかに

浄摩尼珠という珠を　にぎれる水に投ぐれば　珠の用力にて　その水きよくなるがごとし。衆生の心はつねに名利にそみて　にぎれる事かの水のごとくなれども　念仏の摩尼珠を投ぐれば　心のみづをのづからきよくなりて


往生をうる事は念仏のちから也。

と、記されているのがそれである。中国の農家では池の溜り水を担桶に入れ、担つて家の中に常置されている明礬の入った大甕に入れておく習慣がある。ここでは明礬が水質浄化の役を果している。

心のにぎりとは、人間の性のはたらきを指し、それが汚染の根源となつてゐる。一概に人間の性といっても、具体的には数えきれないほど多いから、無数といわれる。しかしその代表をむさぼるという貪欲、怒り腹だちという瞋恚、ものの道理を本当にわきまえてないという愚癡の三つにしばらくすることができ、しからば人が生まれながら具えているこの三つの汚染の根源は、称名念仏のはたらきによつて、どのように浄化され、人格の形成に役立つであらうか。

この貪欲、瞋恚、愚癡という三つに代表される人間の性を激しくはたらかせる人であつても、阿弥陀仏のみ名を呼び・となえるならば、阿弥陀仏の光明、とくに清浄、歡喜、智慧という三とおりの光明のはたらきを受けて、貪欲の人

は「無貪清浄の身となり、持戒清浄の人と等しい」人となり、また瞋恚の人は「忍辱の人と同じ」人となり、愚癡の人は「智愚の勝劣あることのない」人になるとは、『逆修説法』（三七日の条）に示された法然上人の言葉であり、上人が『選択集』のなかに「よく瓦礫を変じて金となさしむ」（第三章私釈殷）と指摘された言葉を想起せしめられる。このように手の平をかえすように、今までは異なった人になれるのは、貪欲などの人間の性を断じたり、持戒、忍辱、智慧の行を実践した結果ではない。人間の性をもとどおり具えながら、称名念仏をとおして阿弥陀仏の光明に触れて、人間の性のはたらきがでなくなつたことを意味する。かくして称名念仏には人格の形成に大きなはたらきを持つことを認めざるを得ないのである。空気や水に負けず劣らず、人の心も汚染を進めている。そのような実社会のただ中であつて、称名念仏の果す役割もまた甚大といふべきである。



信心とはなにか

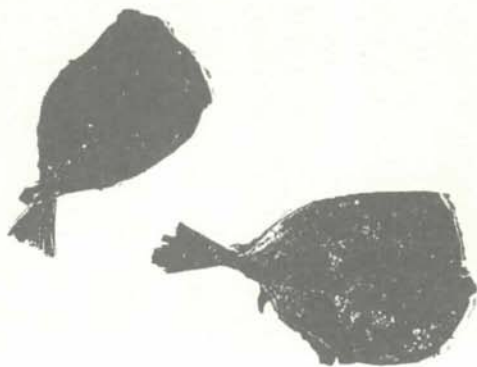
— 現代の信心 —

養老孟司

明治時代に信心について調査したという話がある。年齢別に信心の割合を調べたら、年若い人ほど信心の率が高く、若い人ほど低かった。そこで、調査をした学者は、将来の日本では、宗教が力をなくすであろうと予測したというのである。ところが昭和になって同じ調査をしたら、まったく同じ結果が出たという。要するに年をとれば、若いときより信心深くなる。その傾向はいつの時代でも変わらない、というわけである。

論理を好む若者なら、年寄りには、ボケるから、信心の率が高くなるのだと思うかもしれない。ボケてなければ、信心なんかするものか。たぶんそれは違ふと思う。むしろ若者には自分が信心をしているという自意識がなく、年寄りにはそれがあるというだけの話であろう。信心には自意識の問題が絡んでいるから、「信心していない」と自分でいうのは、とくにこの国の場合には、アテにはならない。困ったときの神頼みというくらいで、困ると突然信心が増えたりする。

それだけではない。信心についての根本的な問題は、なんらかの信心なしに、人は生きられるかという、そのことである。この国では、その種の議論をせず、その種の教育をしない。その問題自体が、社会的には伏せられている。それは、じつのところ、教育がいまだに教育勅語の精神で行われている例証なのである。教育勅語には、信心は一切ない。あるのはマニュアルのみである。勅語を作ったときの文部大臣、芳川顕正は、あの勅語には入れてないものが二つあるといった。それは宗教と哲学である。だからこの国では、戦前は信心がむしろ「神がかり」になってしまった。神がかりはじつは信心ではない。「愚きもの」である。だからコロリと落ちる。もちろん終戦後には、その神がかりはコロリと落



ちた。同じような事態が、性懲りもなくオウム真理教でくり返されるのを見ると、なんだか悲しくなる。

人にはなんらかの信仰、すなわち信心が必要である。そう思えば、ほとんどの人がなにかを「信じ」、なにかにすがって生きていることに気づく。現代人なら組織を信じ、組織にすがる。だから「会社裏切られた」などという。考えようによっては、会社とは実在のものではない。ご存じのようにあれば「法人」で、法という約束事のもとの人格だから、消えるときには消えてしまうのである。そんなものに「裏切られた」と思うのは、もともと自分に会社「信心」があったからだが、自分は信心なんかしていないと頭から思っているから、会社に対する自分の忠誠が、じつは信心の一種だとは、夢にも思っていないかっただけのことである。

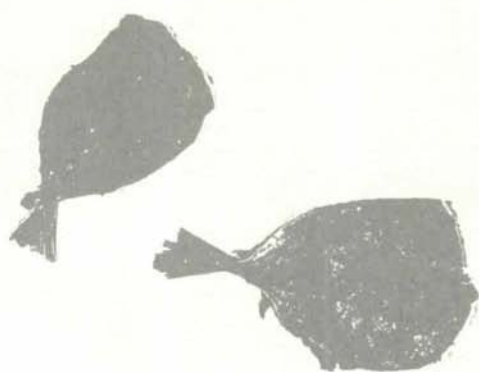
その意味でいちばん性質が悪い信心は、多くの自然科学者の信心である。たとえば私が信心について論じていると、そんなものは科学ではないと冷笑する。信心は科学ではないが、それを論じることとも科学ではない。だからどちらも価値がないのである。それなら科学とはなにか。客観的な実在を探索する、実証的なものだ。だから科学は、物質的な現象を扱うのだという。それなら科学というのを、ちよつとここに出して見せてくれ。もちろん科学は物質ではないから、出すわけにはいかない。そういうものに最大の価値を置いているのに、科学でないものを冷笑する。認めない。それならそれは科学信心である。

客観的というが、それをいうのは本人である。人間を抜いてしまつたら、主観も客観もクソもない。人間がいなくなつても、地球は残る。宇宙は残る。そ

うかもしれないが、人間の消えた宇宙を論じてもムダである。少なくとも私には関係がない。その宇宙を論じている本人にも無関係であろう。そもそも人間が消えてしまえば、主観が消える。主観が消えれば、客観には価値がない。

そういうわけで、人間から信心を抜くわけに行かない。そういう結論になる。科学者は科学信心だし、会社人間は会社信心である。マイ・ホーム主義者は、マイ・ホーム信心であろう。現代社会では、ほかにもあまたの信心がある。たとえば金信心。年老いた政治家の家に、金の延べ棒が何本もあつたりする。これは典型的な「金」信心であろう。それがあれば、いざというとき「安心」なのである。だから、なんのためだかわからなくなるほどの額まで、お金が貯まつてしまう。まさに困つたとき金の頼みのつもりだつたのだから、肝心のその困つたときが来ないうちに、横から司直の手が入ってしまった。そのときには金が役に立たなかつたらしいから、やはり金信心で安心を買つても、限度があるとわかる。金より神信心のほうが、ふだんは馬鹿らしいようで、必要なのはお賽銭でいどだから、あんがい元手がかららず、気持ちの上でははるかに役に立つ。

安全信心は、現代社会に行き渡っている。危険なことをすると、たちまち消防署に叱られる。なにごと安全第一。そういうながら、その自分がいつかは死ぬ。それは私が保証する。その安全第一も、神戸の地震を見ると、大分あやしい。高速道路がきれいに寝てしまったのには驚いたが、私は素人だから、その理由はわからない。予想もできない大地震だつたからだというが、次の地



震がどのていどの大きさが、そんなことがわかるわけではない。高速道路が倒れない地震なら、高速道路は大丈夫だが、倒れるような地震ならダメです。そういうしかないであろう。それならいわれなくてもわかつている。

お勤め信心、これも普及している。そんなことしたら、会社を首になる。私が正しいと思うことを勧めても、そういう返事が返ってくる。首になるのが恐いのである。なぜならその先「どうなるか」、それがわからないからである。食えなくなるかもしれない。だからやめられない。それなら、現在の自分の勤めを最善と信じるしかない。だから会社のために、と悪いこともするのであろう。そこまていけば、やはり信心というしかない。信仰のために人を殺す宗教はいくらもある。

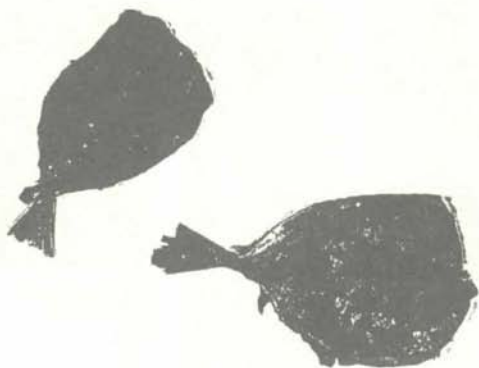
現代人最大の信心は、合目的信心である。ああすれば、こうなる。それで暮らすのが最善だと信心している。これはとくに官庁に多い。ああすれば、こうなる。結果がわかつていけば、そうしますという。わからなければ、しません。あんだ、自分がいつなんて死ぬか、それがわかつているのか。そう聞きたくなる。この信心は一面きわめて傲慢である。意識以外のものを認めないからである。合目的とは目的に対して最善の手段を用いることである。人は目的を「意識」し、それに対して最善の手段を「意識的に」選択する。

それでなにが悪い。そう思ったとすれば、あなたは典型的な現代人、都会人である。すべては意識だと信じているからである。だからこれは一面、意識信心である。意識信心の問題はなにか。すでに述べたことからわかりであろう。人間はすべてを知っているわけではない。ゆえにどれが最善の手段か、最終的

にはわからないのである。にもかかわらずわかることしかやらない。そういうつもりでいる。それは安全で慎重で理性的に見える。しかしそれなら、子どもは生めない。どんな子が産まれるか、あらかじめはわからないからである。だから現代では、出生率がどんどん低下する。

現代社会では、信心が減ったように思う人があるのかもしれない。すでに述べてきたように、私は毛頭そうは思わない。信心は人間の基本的な性質であり、それがなくなるわけがない。意識しか存在しないと思っているから、無意識の信心に気がついていないだけのことである。逆にいえば、現代人はそれだけ信心が強い。たとえば客観信心である。唯一絶対の客観的現実が存在する。この客観信心も、現代人の典型的信心であらう。そもそも、「唯一」がつくところで、すでに信心ではないかという疑いが生じる。「絶対」は私がつけたのだが、そういつて差し支えないはずである。科学者であれば、まずこの信心にどっぷり浸っている。だからその種の「現実」を数字にすると、多くの人がすぐに信じる。それを利用した政治家がいたのは、ご存知のとおりである。

それにしても唯一絶対の客観的「事実」が存在するはずだ。それは、そう思っているだけのことである。実際には、その現実を提示することはできないからである。たとえば、日本の人口を考えたらすぐにわかる。この瞬間にも、人は生まれ、死んでいく。密入国も出国もあらう。それだけではない。シヤム双生児だって生まれる可能性がある。これは一人か、二人か。こうして、実際には測定できない人口が、「客観的に存在する」とあくまで思っている。これが信心でなくて、なにが信心だというのか。



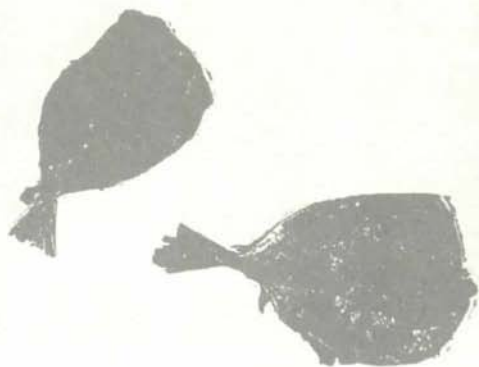
それなら真の信心とはなにか。宗教家なら、当然それをよく知っているはずである。宗教的な信心もまた、右のような信心と本質的には違わないはずである。キリスト教なら、それは唯一絶対神である。それは唯一絶対的な現実とは両立しない。唯一絶対が二つあるわけがないからである。だからキリスト教文化圏の科学には、ある種の余裕がある。事実をとことん追求しても、あとは神様が面倒を見てくださるはずだからである。この国ではそうはいかない。あんまり事実を追求すると、世間が壊れてしまう。壊れてしまうかもしれない。それを恐れる。

それで思い出したが、もう一つ重要な信心は、世間信心である。この国では、世間に迷惑をかけるなというのが、絶対的な教育である。つまりそこでは世間が絶対である。世間の皆様はどうお考えか。それをしっかり聞いて、それからおもむろに自分の意見を決める。行動を決める。大事なことを決める前に、ギリシヤ人がアポロンの神託を聞いたようなものであろう。国際化しても、この信心は同じである。アメリカ人はなにを考えているのか。それがわかったら、私はこう考えますと返事ができる。それがわからないうちは返事ができない。「ノーと言える日本」というのがあったが、あれはそのことがいたかったのかもしれない。しかし、自分のところでもいつもやっていることだから、外へ出てもやっぱりやってしまう。だからいつまで経っても、国際的には世間信心である。なにがとも皆様のご意見をうかがってから、ということになる。逆に、ご意見をうかがわれなかったと思う人は、しばしばカンカンに怒ってしまう。これが困るから、大学などでは、ありとあらゆることを紙に書いて配る。配って

おかないと、いつだれが、俺は聞いてない、と怒り出さないとも限らない。

信心は人間に欠くことができない。そんなもの、なくてもいい。そう思っている人は信心の必要を感じないほど幸福な状況に置かれていたか、自分の信心が見えていないだけのことである。お前はなにを信心しているかと聞かれそうだが、私は自然を信じている。それならアニミズムではないかとさらにいわれそうだが、そういうつもりもない。なぜなら、私が信じているのは、具体的な個々の自然ではないからである。そんなものをうつかり信用したら、大変な目に遭う。地震はやっぱり、いつ来るかわからない。ただし、いつくるかわからない、そのことだけは信用できる。しかもいづれかならず来るのである。それは私の死も同じである。この自然信心は、いつてみれば、人工つまり意識を信用しないということの裏返しでもある。人の作ったものは、いづれにせよ、見かけほどにはアテにならない。あるいは見かけに反比例する。銀行の建物が目抜き通りであって、いかにも立派なのは、その必要があるからであらう。その必要があるということはつまり、せめて建物でも立派でなければ、信用してもらえないということであらう。富士山は必要があって立派なわけではない。国威を発揚しようと思って、ああいう形になったわけではない。あれはもともとあなのである。だから私は富士山を信用するのであって、銀行の建物を信用するわけではない。そんなことが山岳信仰の裏にあるのではないか。ともあれ私は、やっぱり日本人なのであらう。なにごとの、おわしますかは知らないが、富士山なら頭を下げてもいいと思うのである。

(前東京大学教授・解剖学)



特別寄稿

法然上人と私

齋藤耕善

『やあーい、実の阿呆!!間抜け……。』

小学校一、二年の頃私はよく友達に馬鹿呼ばれをされ、仲間外れにされたものでした。無理ありません。実際勉強嫌いで遊んでばかりいたし、学校の成績も六年間通して常に最下位で、また悪ふざけをしては先生に叱られていましたから……。

『お前は勉強が嫌いならせんでもいい。だがお仏飯を頂いて育ったんだから本尊さまや元祖様のご恩を忘れたら罰が当るぞ。』

亡き父はそう行つて半ば私の知的向上を諦め、その代りに仏恩報謝の心情を育てようといふ愛の鞭をびしびしと当てて、小学校一年生に入學した頃から毎朝暗い本堂に伴ないむずかしい六時礼讃や浄土三部經を何度も繰り返し繰り返し発声したり読めるように教えてくれたものでした。『継続は進歩なり』と言われるように不思議なもので、毎朝読誦する三部經のお陰で、国語（詳しくは読み方、書き方、綴り方）は小学校六年間を通して甲で、担任

の先生も首を傾げ感心しておられました。

◇誤まった「法然觀」を持つ

私は大正十年佐渡相川の廃寺となった浄土宗専光寺という小さな寺に生を享け、大正十二年三河渥美町の先年で遷化になられた、浄土宗詠唱教導司鈴木錦承上人の住持真如寺の末寺薬師寺において、小学校尋常科六年を終える迄住まわせて頂き、亡父誠実和尚の訓育を受けたのですが、その父は薬師寺において毎月二十五日信者（老婦人ばかりでした）を誘い念佛講を開いていました。

念佛講は始めに一紙小消息をお唱えし、次に一枚起請文を読誦してから、約一時間ばかり称名念佛をするわけですが、私が子供心にも深く感銘を受けたご法語は小消息の前段に開陳されている……『末代の衆生を往生極楽の機にあててみるに行すくなしとても疑うべからず、一念十念に足りぬべし。罪人なりとても疑うべからず、罪根深きをも嫌わじと宣

えり……”というくたりでした。と言うのは
実は私はこの毎月二十五日夜元祖さまの御命
日忌に催される別時念仏会に随喜はしたもの
の、それは信心からではなく、不実の空念仏
であり、然もある種の罪業を重ねていたので
あります。

と申しますのは、貧乏人の子沢山で両親は
私を含めて十人の子持ちでした。尤も上の姉
二人は既に住み込みで働きに出ていましたし、
兄も大本山清浄華院七十一世大野法音大僧正
の弟子にして頂き、伊勢松阪市の樹敬寺に入
室修行中でしたが、なんとと言っても貧しく母
が作ってくれる、おやつだけでは物足りない
わけで、この月一回の念仏講の終わった後出さ
れるお菓子が欲しくて、眠いのを我慢しての
随喜でした。それとも知らず参加されたお婆
さんたちは口々に

『和尚さん、実さんは小さいのに感心だね
え、今にきつと偉いお坊さんになるよ。』
と褒めてくれましたが……それを誠に罰当り

にも軽い気持ちで、“罪人なりとても疑うべか
らず”と元祖さまは仰せられるのだからと空
念仏ばかりか、殆んど盲目に近い父の目を掠
めて自分の傍に転がって来たお賽銭はそつと
ポケットに隠すこともありました。

小学校六年になった頃には本寺（真如寺
先々代の源承大和尚）へ父と一緒に行って大
法要に式衆として随喜し、三部経もすらすら
と読み、三尊礼も唱えられるようになり、一
人前のお布施やお料理詰、引き出物の菓子箱
を頂けるようになりました。そうして昭和九
年三月尋常科を卒業すると、父の縁者の仲介
で名古屋市東山にある相応寺（故真野耕雲
師）の弟子に加えて頂き、得度して師僧のお
名前の一文字「耕」を授かり幼名「実」を「耕
善」と改名したのであります。

師僧は私がまだ年端のいかない子供なのに
法式が出来る、檀家の法要などには、執事
と私を必ず伴れて行ってくれました。そして
進学についても、自分に向学心があるならば

東海中学に行かせてやるし、ただ坊さんの資格を取り、父親の許に帰って薬師寺を継ぐつもりならば宗学院に行くがよい。と二者択一を示めされましたので私は父と相談をして宗学院へ進むべく、近くの田代尋常高等小学校の高等科に入学し、二年の課程を終ると、建中寺山内にあった名古屋普通宗学院に入学したのでした。然も相変らず勉強は苦手だったが、三年間通う間に私はかつて相応寺に随身して宗学院を卒業した先輩たちが、時折り寺の大法要などの時手伝いに来られるが、田舎の小寺院にひっそりと住んでおられるのを知り、矢張り今少し若いうちに勉強をしなければならぬと気づき、当時知恩院山内にあった教師養成所（修業年限二年）に進学したいという仄かな願望が沸いて、師僧や田舎の父に相談したのですが、父は学費は出せないが何処か大きなお寺に随身して自分で学費を捻出して通うならよいだろう。と賛成してくれましたが、師僧は私の宗学院の成績が余りに

も悪いと反対して許してくれませんでした。そこで私は阪神方面の寺院では檀家の月忌詣りが多忙で随身を募集している、という情報を得て、師僧には内密で神戸のある大寺院へ履歴書を送り、一年間随身させて欲しいと手紙を出し、宗学院を卒業と同時に師籍を出る事にしたのでした。師僧はかんに怒りましたが、耕善は遊興費欲しさに、出稼ぎのつもりで勝手に私の手許をとび出すように将来が心配でならない……という手紙を父に出して止むなく許してくれました。

私は神戸の寺でも信頼を得て一生懸命勤め一年後曲りなりにも教師養成所に入學し昭和十七年三月二ヶ年の課程を卒業、直ちに祖山で加行を受け、五月には現役兵隊として開戦間もない第二次大戦に海軍々人として参加したのでした。

◆法然上人のご法語「親縁」を実感

戦争というのは人間のする事ではない。私

は捷一号作戦という大戦に二等駆逐艦の対空三連装二五ミリ機関銃の射手として延べ十時間にも及ぶ激戦に参加したのですが、その時泌々そう感じました。敵も味方もないのです。この地球上の何処に生まれ、何処に住もうが、皮膚の色が白かろうが黒かろうが、皆人間は両親の深い愛情によって、生まれ難き人界に生を享け、ご先祖のそして大御親である阿弥陀如来のご加護を頂いて生かされているのです。

私は激戦によって重傷を負い、軍医長も手当ての施しようもない十七、八歳の志願兵を『斉藤、お前は坊主だろう、あの者達を何んとか看取ってお浄土へ送ってやれ!!』

と軍医長から言われ、戦闘の間隙を縫っては『ああ、苦しい。…水、水…』とか『殺してー助けてー』『お母さーん…』と叫ぶ少年志願兵の傍へ行って血濡れた両手をしっかりと握り締めて、彼らに引導をわたしてやるのでした。勿論引導と言っても香語を説き聞かせた

り、お経を読んだり念仏を唱えたわけではなく、『おい!!しっかりせんか。戦さはもう終わったぞ……本艦はもう間もなく長崎に入港するぞ……今暫らくの辛棒だ。(と言って汚れた胸の名札を見て、例えば「二本山本」とあれば)山本!!聞こえるか、お前のお袋が岸壁で手を振って待っているぞ!!』と励まし、しっかりと抱きかかえてやるのです。すると、あれほど顔を歪めて断末魔の苦痛に耐えていた彼らは、形相も穏やかになり、口許に微笑すら浮かべて、抱きかかえる私の両手を恋しい母親の手と混同してか『お母さーん…』と蚊の鳴くような弱々しい声を立て息を引き取るのでした。私はその瞬間、合掌し『如来大慈悲哀愍摂取』と称え念仏十遍を授け、英霊の両手を又手合掌に組んでやり両脇をそっと閉じてあげました。つまり私の引導です。

思うに彼らは私を母親と信じ、遠ざかる意識の中で夢にまで見ていたであろう恋しい母親との対面を果たし、私の称える「南無阿弥

陀仏」の声を深く耳底に刻みながらお浄土へ旅立って行ったのであります。それは間違いなく元祖さまが善導大師のご法語にある「三縁」を訳された中の「親縁」に「衆生仏を礼すれば仏これを見給う。衆生仏を唱うれば仏これを聞き給う。衆生仏を念ずれば仏も衆生を念じ給う。かるが故に阿弥陀仏の三業と行者の三業とかれこれ一つになりて仏も衆生も親子の如くなる故に親縁と名づく」とある其のお諭しそのものであると存じます。

これは昭和十九年十月二十五日フィリピン東方海上における米太平洋艦隊航空戦隊との戦闘で撃沈された佐世保鎮守府所属の一等駆逐艦「秋月」の重傷者の中で私共「横」が救助後戦死した少年志願兵数名を看取った体験であります。私はこの戦争で本艦の戦死者三十一名と「秋月」の戦死者（何れも本艦に収容後死亡）八名の合計三十九柱の水葬式に艦長の命を受け導師を勤めさせて頂き、浄土宗侶であった事を戦後五十年を経た今日も

尚有難く誇りに思っております。と同時に怠慢だった為に一番知識を吸収し実社会に出て（殊に大乘仏教の中核をなす浄土宗の教師として）正しい教化伝道をしなければならぬ青年期を失い、それが出来ぬ儘に今日に至りましたが、私は私なりに宗祖法然上人の尊いみおしえを遵守し、只一筋に称名念仏の日暮しをさせて頂いております。

考えようによれば私は無知無学なるが故に救われ生かされているのだと思います。前述のように先きの大戦においても九死に一生を得させて頂いておりますし、昭和五十六年には胃ガンを患い、主治医から『長くて半年生きられるかどうか……』との診断を下されながら、主治医の指示忠告を無視して、夜間密かに病棟の屋上に出て称名礼拝行を続けたことなどが益したものか、あるいは自癒力が体調に合わせて行った礼拝によって活性化しガン細胞の転移を妨げ、五年間の集中治療にリオドを打てたのかも知れません。

何れにしてもその時病床において読ませて頂いた数多くの図書の中で、彼の仏教詩人坂村真民先生の詩『念ずれば花ひらく』この言葉に強烈なインパクトを受け、宗祖法然上人のお説きになられた「親縁」を固く肝に銘じひたすら欣求浄土を目指し、一念発起した百万礼称名念仏を三百六十五日怠ることなく続け、二月十九日現在九七七二〇〇礼且つその功德無辺なることを本年も檀信徒の皆さん方に説きすすめております。

「生けらば念仏の功つもり死なば浄土にまいりなん、とてもかくてもこの身には思い煩うことぞなし」と思いぬれば死生共に煩いなし」

（山梨・西運寺住職）

親縁

表紙は語る

野草花ごよみ

3月

ユリワサビ

(アブラナ科)

山の溪流のほとり等水分の多い所にはえる。野生のアブラナ科の植物は一般に花は見ばえしないものが多いが、この植物のくっきりした清楚な花は山を歩いているとよく目につく。ワサビと同じワサビ属であるが、根は大きくならず、全体にワサビより小さく繊細である。全体を山菜として利用できるそうである。

撮影場所 東京都八王子市



もうひと花

アズマイチゲ (キンポウゲ科)

東一華。野性のアネモネの仲間では一番早く咲き始める。直径3〜4 cm位の花を重そうに傾け、やわらかい葉を垂らしぎみにして立っている姿にはけなげなものを感じる。日の当たらない時は花をつぶめたままにしている。花卉のように見えるのはがく片で、花卉はない。がく片は8〜13枚。山の落葉樹林のへり等にはえる。

撮影場所 東京都八王子市

表紙Photo/Report
石井敏之

連載

魅せられて映画に〈私流映画講座V〉

丸林久信

変な

ひとたち

撮影所こぼれ話

鶴さん。そのひとはこう呼ばれていた。ツ

ルさん、いかにも優形の二枚目（歌舞伎の役柄で、番付の第二枚目に書かれたところから出た名称で、若い色男ふうの美男役者）を想い浮かべるところだが、どっこい、そんな生易しい出来物ではない。相撲取りぐらいの巨体の持主であり、映画界で彼の名を知らない者はもぐりといわれるほど、名の通った名物男、ライトマン中のライトマン（照明技師）である。

一見、ひと当りのよさそうな好人物にみえるが、それがくせものの、ひとたび臍が曲るとどこまでも曲って、手に終えぬ痼癪持ちに変貌するのである。かと言って、腹立ちまざれに直ぐ怒鳴りつけたりはしない。慇懃無礼、まずはやんわり穏やかな関西弁で始まる。で、相手がかうっかりそれに乗せられ油断をしようものなら、さあ、たいへん。毒舌を雨霰と浴びた拳句、まずは生命のひとつやふたつは亡くす覚悟をしなければならない。そんな凄

威圧感をもった男、それが鶴さんだった。

ある日の撮影のとき。これも名の通った主演のM・Tさん。さして演技が上手というわけでもなく、おまけにセリフ覚えが悪いときているのだが、なぜか女性ファンが多く、モテモテの俳優である。会社にとってはドル箱的存在でM・Tさまさま。M・Tはそれを鼻にかけ、このごろやけに態度がデカイ。鶴さん、それが気にいらぬ。

撮影開始。M・Tのセリフがつかえる。NGまたNGの連続。それでもM・Tは口先だけでは「ごめん、ごめん」というが、いつこうに悪びれたところはない。監督の顔がびくびくしていらついているのが判る。当時、新米助監督だった私は、辛棒よくカチンコを叩いているしかなかった。こんな大スターになにか言える身分ではなかったのである。と、不意に

「M・Tさんよ」

鶴さんのやけにやさしい声だったのである。

(そら、始まったぞ!)この大スターを相手に、鶴さんはどう出るのだろうか。怒声、爆発、鉄拳が飛ぶか、それとも……。私たちは息を詰めて両者の成り行きを見守った。

「まだ日は永い、ゆっくりセリフを覚えてえな。あんじよう頼んまっせ」

言うなり、ライトの電源を切ってしまったのである。スタジオ内は真つ暗になり、僅かに室内灯を残すのみになったのである。鶴さんは助手たちにセットからの引き揚げを命じたのである。

「お前たちがうだうだ居ると、M・Tさんセリフが身に入らんよってな、早めしや。判つたな!」

この(判つたな)の言葉は、助手たちへよりもM・Tへの挑戦である。

(ライト消したのがどこが悪い。文句あるならいつでも相手になつたて)

言外に窺_うめられた鶴さんの気魄のものの凄いこと、こちらの腹にもずうんとくるほどだ。

一九四七年(昭和二十二年)七月二十四日、ビルマから復員、八月に入って撮影所に戻った。

まず、表門でばったり顔をあわせたのが鶴さんだった。はじめ怪訝_{けげん}な様子で、それこそ穴のあくように私の顔をみつめていたが

(うおうッ)

声にもならぬ声をあげ、私の肩を荒っぽく掴むと

「よく帰ってきたな。おい、足をみせろ、ははは、立派にくつついてやがる。そうだな、おめえは死ぬタマじやねえものな」

豪快に笑いとばすと、撮影所いっぱいに響けとばかりの大声で怒鳴ったものである。

「マルが帰ってきたぞ、丸さんがよう!!」

やがて、私がチーフ助監督になった。ある作品で鶴さんと一緒になった。

「あかんな。民主主義になりよって、昔のようになんかといけなくなつたぜ」

そう言えば鶴さん、痩せたように見えた。



『のり平の三等亭主』の撮影風景、女優は伊東絹子。

「なあ丸さん、一本やんねえか」
「だめ、だめ、駄目だよ」

私はあわてて手を振った。鶴さんの手に注射器。ヒロポンである。

敗戦後から一九五〇年（昭和二十五年）前後、どこの撮影所でもヒロポン、カストリ焼酎、バクダン（メチール入りの酒）が流行っていた。はやっていたというのの変な話だが、敗戦、争議、分裂のあとの映画制作。撮影所は息を返すのも早かったが、その仕事振りもすさまじく、徹夜につぐ徹夜、とても人間業とは思えない。従って、ヒロポンで眼を醒まし、目が潰れるのも覚悟でカストリ、バクダンを吞んで空元気をつけての仕事が日常茶飯事だった。

S監督とシナリオ作家Yさんが脚本執筆のため旅館に缶詰めになっていた。チーフの私は打ち合わせに行き、その部屋に入って思わず息を呑んだ。テーブルの上にひろげられた原稿用紙のそばに、無造作に散乱している

ヒロポンの注射用のアンプの山。それは山としか言いようのないほどの量だった。

バレたとなると、監督さん、なにげなく

「丸林君、キミもやるか」

と注射器を差し出したのである。

この監督、ポンを打ったとたん、元氣と自信に満ちあふれた演出をみせるが、ポ断れると、不意に、人が変わったようにおどおどしはじめ自信喪失、さっき言ったことと、いま言うことではまるつきり正反對の豹変ぶりとなり、俳優もスタッフもお手上げ状態になつてしまふのである。

第十節 風紀衛兵（歩兵新須知・抜粋）

一、風紀衛兵は兵營毎に之を設け、週番司令の指揮に属し、營内の（当該部隊に属する兵營付近の建物及諸物件を含む）取締或警戒に任じ、營門出入の者を監視するを任とする。

一、風紀衛兵は、司令、營舎掛、歩哨掛、及喇叭手から成り、其の哨所は通常、軍旗、

營門、營倉、彈藥庫である。

軍隊経験のあつた者は誰でも歩哨勤務についているのである。春とか初夏はまだいいのだが、真夏、厳冬ともなると、こんな辛い勤務はないのである。私自身も立哨中に、軍隊への空しい嫌悪感、我が家への郷愁、激しい孤独感からいつそ逃亡したくなる衝動になんどとなく襲われたものだった。どこの連隊にも必ずある話だが、營庭の一番端にある彈藥庫は昼でも薄気味が悪かつたし、營倉はなんとなくじめじめした獄舎の匂いがした。彈藥庫、營倉歩哨は氣の重い嫌な任務だったのである。

首縊りや舌を嚙んで自殺をした兵隊の幽霊、そしてまたその兵隊のあとを追つて死んだ女のお化けが夜な夜な現われるなどと、まことしやかに言い伝えられ、怪談ばなしにはこと欠かなかつたのである。ある物音にびくつき、なにかの影に怯える。また、うつかり居眠りでもしていたところを巡察將校にみつかった

りすれば、當倉間違いなしてある。

(怖いものなしの勇氣が出る。眠氣が吹っ飛ぶ薬である)

衛兵司令から錠剤が渡される。それがヒロポンの錠剤である。そして、言われた通りにしやきつとするから不思議だった。一時間の立哨が終ると假眠。ヒロポンが効いているから眠れない。そこで、渡されたのが睡眠剤。いま思えば非道い話だが、やがて、ヒロポンは特攻隊の士気を鼓舞させ、敵艦体当り作戦に使用されるようになったのである。

私は、鶴さんやS監督、Yライターたちのヒロポンをみて、少し前までいた軍隊生活時代を思い出し、暗澹としたのである。

歩哨のときに服用し、それが病みつきになり、異常者になった者もいた。月に二度から三度の歩哨で使ったばかりにである。

それが、撮影所で服用していた連中は殆ど毎日である。ヒロポン、睡眠薬、カストリ、バクダン……作用の相反するものを吞んでい

るのであるから、これで頭にこなかったら不思議である。事故を起したり、亡くなったりと。いろいろなひとがいたのである。

軍隊解体。野放しになった薬品の弊害のなかで、この覚醒剤は害毒の最たるものだったのではなからうか。前述のひとたちもだが、ヒロポン禍、バクダンの被害にあった連中の末路は悲惨なものがあつたのだ。

さて、こうした暗い話だけでなく、撮影所には不思議な人種が多かったのである。

K・Sという助監督。敗戦後、衣類もままならぬ事情もあつたが、この男、徹底していたのである。雨が降ろうと槍が降ろうとも着たきり雀。真冬の北海道のロケ先で、ずぶ濡れになった服を着たまま平然と仕事をし乍ら曰く

「体温で自然に乾くよ」

そのくせ、下着だけは毎日取りかえる清潔家(?)なのである。いつも濡れた臭い服を着たまま日向ぼっこをして、ぶ厚い本を読ん

でいる姿をよく見掛けたものである。

「あいつ、大物になるぜ」

そう。彼は大物になったのである。

友人の脚本が気にいらず、チーフの私に書き直させ、OKをとったあと、義理が悪いから俺には撮れないと言ひ、小田基義監督に演出を譲ったマキノ正博監督の、変屈なまでの義理堅さ。女千人斬りと称して憚からぬ名優H・M氏。覗きがばれて、代りに私がロケ先の温泉旅館を軒並みに謝まり歩かされた小道具のS君。私が叱驚りしたほどの豪奢なセットの室内装飾にも

「ああら、なかなかいいじゃないの」

とばかりに平然とセットに馴染んでしまう飯田蝶子、三宅邦子の両オバサマ。あとで聞けば、おふたりのお宅は、このセットに輪をかけた立派な大邸宅だとか。私はビルマから生き残ったおかげでいろいろなひととの出会いがあったのだと、いまさらのように幸せを噛みしめている昨今です。

注1 エヌ・ジー(NG) 使用できないフィルム

をエヌ・ジー・カットといい、また、演技や撮影で失敗したときもいう。ノーグッド

(NO GOOD) の略

注2 早めし いわゆる早めし早ぐそという意味とは違い、この場合、仕事のキリのいいところで、食事時間をくりあげて食事をするこ
とをいい、その反対がめしぬきて、パンやにぎりめしの代食をとりながら、仕事を続行するのである。

(文筆家・元東宝映画監督)



『家内安全』（東宝1958）飯田蝶子さんとセツトで打ち合わせ。この作品、飯田蝶子映画歴三十年での、初めての主演作品である。

シャプラニール事務局長

川口善行

外国で
生活して
⑧

生活習慣の違いにふれて

南米／バングラデシュ



サンパウロのビジネス街（1975年）

外国人やその文化について、違和感を覚えるのはどんな時だろうか。一九四三年（昭和十八年）生まれの私にとって、最初の外国人は占領軍の兵士たち、つまりアメリカ人のことだった。とにかく大きくて、陽気で、そしてみんなお金持ちに見えたものだった。自動車や白ベンキの家に冷蔵庫、コカコーラにチヨコレート等々、今になってみればそれほどのもではないが、当時の食うや食わずの日本人にとっては豊かさの象徴だったと思う。その頃まだ幼い子どもだった私にとって、アメリカ人はあこがれの対象ではあっても文化の違いを意識するような相手ではなかった。

一九六五年、学生生活最後の年にアメリカを二カ月にわたって一人旅をする機会を得た。敗戦後の日本にとって初めての国際的なイベントである東京オリンピックを前年に開催し、いよいよ輸出大国への道を歩き始めた頃とはいえ、一ドルは三六〇円、携行外貨は一人五

〇〇ドルに制限されていた時代である。海外旅行はまだまだ一般的とは言えず期待と不安に満ちて羽田空港から旅立った。あらかじめ紹介を受けたり、中には旅行中に知り合った方々にもあちこちでお世話になったものだ。

旅も一カ月を過ぎ片言の英語も多少通じるような気がしてきた頃のことである。学生時代から現在に至るまで大変お世話になっている私の英語の先生は、アメリカの女子大を卒業されていた。私が初めてアメリカ旅行をするというので、留学時代の友人の一人で当時は結婚して中部の大都市セントルイスに住んでいたメアリーさんを紹介して下さった。そのメアリーさんのお宅に数日お世話になっていたある日、買い物に誘われてお供をした。とある洋品店のショーウィンドーに模様が編み込みになっているバンティストッキングが飾られていたのを見つけたメアリーさんは、私に向かって「あなたのお土産にはあれがいいと思うけれどどうかしら」と尋ねた。

今ではさほど珍しくもないと思うが、当時は国内ではまず見かけることのない派手な代物で、とても我が尊敬する先生が着用するとは思えなかった。そこで、やめた方がよいという意味で「日本では誰もあんなものは穿いていませんよ」と答えたところメアリーさんはいっこり笑って「それならさぞ喜ぶことだろう」と言うなり早速買ってしまった。こちらはずいぶん驚いたが、その後でなほどと感心した。私たち日本人は周囲がしていないことは当然止めた方がよいと考えているのに、彼らアメリカ人は誰もしていないことをするのは素晴らしいと考えている。この違いはどこから生じるのだろうか。私にとって外国人の「ものの考え方」に直接触れ、日本人のそれとの違いに初めて気づいた、まさにカルチャーショックとも言うべき経験だった。

の一九七五年、ブラジル駐在を命じられ、以後三年間をブラジルに暮らすこととなった。その間ブラジル国内だけでなく周囲の国々にも度々出張する機会があったが、日本人と南米各国の人々との違いには驚かされることもしばしばであった。「ものの考え方」の違いについては前に述べたので、今度は「生活習慣」の違いに触れてみたい。もちろん一口に南米とはこうであるとは言えない。広い南米のこゝと、それぞれ地域差があり、さらに一人一人の習慣の違いもあるが、私たちににとっては当然と思ひこんでいた生活上のきまりでも所によつては随分と違うものである。

あると聞いていたので、ブラジルでもしやと期待していた。残念ながら、勤務地のサンパウロ市は高層ビルの立ち並ぶ大都会で通勤に時間がかかるため、もうずっと以前にそんな習慣は廃れてしまったとのこと。都会のサラリーマンの勤務時間は東京と基本的に同じだった。

ところが初めてブラジルのお隣のパラグアイを訊ねたときのことである。前もって連絡してあった現地の同業者の出迎えを受け、宿舍のホテルに案内してもらった。昼少し前だったので商談はひと休みしてからとなった。つい何気なしに「一時から始めましょうか」と言っただころ、あいてはもじもじしている。さては噂に聞いた昼寝付きの長い昼休みをとる気だなと察して「それでは二時にしましょう」と言っただまだ、もじもじしている。当方も困ってしまつて、何時なら都合が良いのか尋ねたところ「いつも午後の仕事は四時から始める」とのことだった。朝は八時に始業、

十二時から四時間の大昼休みをとつてから再び午後八時まで働くそうだ。これは民間会社のこと、役所の多くは朝七時に仕事を始めて午前中で終わりだそうだ。後は何をしているのかと尋ねたら、「いろいろあるのだらう」と笑つていた。これは二十年前の一九七五年のこと、今はもう変わつていくかもしれない。

それからしばらくしてアルゼンチンに出張することになった。ちなみにブラジルではポルトガル語が話され、ブラジル以外の南米諸国ではスペイン語が公用語である。当然私のポルトガル語は上手くはなくとも何とか通じたが、スペイン語はきわめてあやしい。そのあやしいスペイン語でブラジルからアルゼンチンの同業者に電話で訪問希望を伝えたところ、「事務所で待つている」との返事。首都のブエノスアイレスは南米のパリと呼ばれる美しい街である。前の晩に到着し、翌朝はホテル周辺の散歩を楽しんだ後訪問先に電話を入れたが誰も出ない。九時、十時、十一時と時

間が過ぎていくが受話器からは空しく呼び出し音が響くのみである。先日の電話で「事務所待っている」と聞こえたのは聞き違いだったのだろうか。ホテルから電話会社に確かめてもらったが番号は合っている。まさか数日の間に倒産してしまった訳でもあるまいし、それ以上粘ってみても仕方がないのでひとまず昼食にした。午後になって念のため最後の電話をすると、なんと通じるではないか。後でゆっくり説明を聞けば次のとおりである。アルゼンチンの損害保険会社は一般に正午に仕事を始め、そのまま休憩なしに七時まで働く。その間にお茶の時間があり軽食をとることができる。パラグアイの長い昼休みも驚いたが、世の中に午前中働かない会社があることにはもっと驚いた。先方はそんなことも知らないで訪ねてくる日本人にもっと驚いたかもしれない。

二十二年間勤めた会社を退職してから一年

半の米国留学を経て、一九九一年に現在の職場である「シャブラニール」市民による海外協力の会」に参加する事になった。海外協力あるいは国際交流に関連する仕事をしたいとは思っていたものの、当時はシャブラニールのような民間海外協力団体（NGO）の活動内容について殆ど何も知らなかった。一方その財務内容がきわめて不安定な状況にあることはすぐに判った。この活動にこれからの人生を賭けるという決断を下すにはいささか勇気が必要とした。その時最後の決め手となったのはバングラデシュの農村においてシャブラニールが支援している成人識字学級を見学した時の感動である。この識字学級は男性の場合は一日の重労働が終わった夜八時頃から始めおよそ二時間、女性家事や家畜の世話の合間を縫って日中に同じく二時間勉強する。いずれも週に六日間、六カ月の間続けられる。受講対象者は農村に住みながら食べていくに十分な土地を持たない「土地なし農民」と呼

ばれる人々とその家族である。彼らは地主の土地で日雇いとして農作業に携わるほか、労賃が得られるならば如何なるつらい肉体労働でも厭うことがない。バングラデシュではこうした厳しい生活をしている人々が人口のおよそ半分を占めている。その貧しい人々が実年齢期に学校に行くことができなかった彼らが、成人してから日々の重労働を終えた後疲れた体で識字学級に毎日出席するのはなぜだろうか。義務教育が普及していないバングラデシュでは字が読めないことは特に恥ずかしいことではない。また日本のように読み書きができることが前提の社会ではないので、読み書きができないからといって特別に不便ということもない。もちろん生活上の便宜は多少増すだろう。しかしそれだけであんなに熱心に勉強するのだろうか。人が集まり学ぶこと自体が楽しいのだろうか。親子代々虐げられ続けた結果、どうしようもない無力感に

捕らわれている土地なし農民にとって尤も大切なことは、「自分たちの力で自らの人生を変えていくことができる」と自覚することであり、そのために成人識字学級は重要な意味を持つと言われている。おそらくそれは正しいことであろうが、学校や学問がいれば義務であり強制されるものとなってしまっている日本の私たちには、あのように嬉しうに学んでいる本当の理由は想像を超えるものがある。

アメリカで、南米で、そしてバングラデシュで私が経験し、驚きを感じたようなことは世界中にまだまだいくらかもある筈だ。「ものの考え方」、「生活様式」、そして「感じ方」の相違はどのようにして生じるのだろうか。環境、歴史、教育その他あらゆるものが複雑に影響しているのだろう。しかし、こうした違いに驚く私たちの方が特殊なのかもしれない。本来人間は様々な考え方、感じ方をするものであり、生活様式も異なるのが当然ではない

だろうか。私たちはもともと、世界の人の
生き方に興味を持ち、異なる文化をありの
ままに受け入れることに慣れていかなければ
ならないのだと思う。

かわぐちよしゆき

シャブリーール市民による海外協力会の 事務局長

一九四三年生

慶應大学卒業後一九八八年まで住友海上勤務

米田留学（経営学修士）を経て一九九一年よりシャブリーール勤務



バングラデシュ農村の成人識字学級（1991年）

三月も半ばを迎えますと、親御さんと一緒に卒業式に向かう子供たちの姿を多く見かけます。何年間か、同じ学び舎で共に学び、共に遊び、時には喧嘩もし一緒に時を過ごした友達と離ればなれになってしまふのは本当寂しく、また辛いことでしょう。しかし、その学校生活の中でお互いに培ったものは、たとえ今は気づかなくとも他の何ものにも代えがたい尊いものであったでしょうし、そのことがこれから上の学校や会社という、これまでとは違った環境、荒波の中で生きていく上での大きな力になっていくものと思います。

私たちはこれまで生きてきた中で、学校生活に限らず多くの人たちと出会い、友達という関

若和尚の

二 其 し な い い っ ち ョ

係を築いてきました。では、そのうちで自分にとって本当の意味での友達と言える人はどれくらいいるでしょうか。いろいろな点で気が合い、仲がよいと思っっている相手でも、いざという時に心を割って話し合えるとは限らないものです。反対に、普段はなかなか会うことはなくとも、支えとなってくれている友達もいることでしょう。

助けてくれる友人、苦しいときにも楽しいときにも友人である人、自分のためを思っけて口をきいてくれる友人、思いやりのある友人、これが本当の友人である。とは、お釈迦様の遺された言葉です（『長部経典』）。

このような友人は考えている

よりは案外少ないものです。逆に相手にとってこの自分は真の友人と言えるでしょうか。自分にとっての真の友人を求めるならば、同時に、自分も相手にとって真の友人たりえるようになければならないでしょう。それには、自らを振り返ることを忘れないようにすることが重要なのだと思います。

遊び仲間としての友達もいいでしょうが、先のお釈迦様の言葉にあるような友人を持つことが、豊かな人生を育むために大きなウエイトを占めるはずですから、今後とも出会いを大切に、一人でも多くの真の友達をつくっていただきたいものです。

（正）

彼岸からの声

大室了皓

一、彼岸からの声

参詣の檀信徒に会う。

長年よく見知っている人だと、顔を見ただけでその人の健康状態もほぼ察知することが出来る。何か悩みがありそうだというのも一目で分かる事がある。

「どうですか、お元気でしやうね」

言葉をかけると、

「実は」と言つて、悩み事など打ち明けられる。

話を聞きながら、説教調ではなく、適宜に仏の教え（彼岸からの声）を織り混ぜて応対する。時には一時間以上に及ぶこともあるが、「今日はご住職にお会い出来て幸せです。有り難うございました」

その一言で、寺務などが遅れた焦りも吹き飛んでしまう。

檀家の数が特に多い方ではないので、それが出来るのかも知れない。

しかし戸惑うことが屢々ある。息子や娘さんになると殆ど顔が分らない。先方は住職のことはよく知っているので、懐かしそうに話しかける。そういう人には、

「どちらへお参りですか」と軽く尋ねる。

「……のお墓です」

それから、お父さんはお元気でですか……などと話が弾み、和やかな一時が過ぎる。弾んでくると中には、折角ご住職にお会い出来たのでと、仏の教えのことや、自分や子供・家庭の悩み事などの相談をする人が出てくる。

「仏様は貴方の言う事に対して、どう考えておられるでしやうかね」

こちらから問い掛けると、しばらく考えるから、

「わかりません」と答える人もあるが、中には「きつとこうだと思います」と自分で結論を出す人も少なくない。

この人は、彼岸からの仏の声を聞き取る事が出来るのだと敬服する。

又ただ聞いてあげるだけで、こちらが何も言わないのに、胸がすっきりしましたと、礼を言われることもある。

この人は悩みや苦しみを、私に向かって語っているのだが、次第に仏様が聞いて下さっているという思いを深め、話しているうちに、知らず知らずに仏の声を聞いていたのではなからうかと思ったりする。

ベルが鳴って玄関へ出たら、若い女性が一人居立っている。挨拶しているうちに名前が分かった。

「お母さんのご命日でしたね」

藤沢からの人だ。東京の目黒までは一時間半以上もかかったに違いない。

お墓の方を見たら、姉妹二人だった。寒風に吹かれて墓石を洗っている。その姿に葬儀の時の事を思い出した。悲しみの中にあって、こまごまと世話をしてくれた事なども。

さてという人にあげる粗品が何時も用意し
てあるので、綺麗なハンカチを二箱持つて彼

女たちの所へ行った。

「寒いのに、また遠方なのに関心だね」と二人に渡した。

まさかと思っていたのだろうか、恐縮して受け取った。

「これは私からではない。お浄土のお母さんが、有り難うと言って下さったんだと思いたい」

何気なく言ったのに、手にした二人は目を潤ませて私を拝んだ。

その目を見て、彼岸の母親の声を聞いたのだと思った。

帰りに、再び玄関へ来て礼を言い、本堂前で拝礼して帰って行った。

濁世間に生きる私たちは、貪嗔癡の三つの毒に汚されて、正しい心を失いがちである。

兄弟は仲良くしなさいと親に教えて貰って成長したのに、親が亡くなると遺産をめぐる裁判沙汰になることも少なくない。

貪（むさぼりの心）が心中にむらむらと沸き起こり、自分の労働で得たものではないのに、目の前にぶら下がったお金に目が眩んでしまい、三千世界にたった数人しかない、掛けがいの無い兄弟姉妹を捨てて、お金の方を選んでしまう。

彼岸の彼方にいる亡き親は、相争う息子や娘たちをどんな思いで見ているだろうか。

火葬場への車の中で、早くも口喧嘩を始める人達もいると、ハイヤーの運転手さんが嘆いていた。

彼岸の声を聞く耳を持たないからであらう。自分の思うままにならないと、相手に向かって怒り、罵倒する人がいる。

織田信長と親交のあった宣教師フロイスは、「日本の親たちは、子供を叱る前に、心を静めて言い分を良く聞き、正しい判断の下に論ず。子供だからと決して粗末に扱わない。大人に対すると同じ礼儀を持って接する」と、本国ポルトガルへの「日本通信」に書いていた。

ている。

嗔（怒りの心）は相手を傷つけ、自分をも駄目にする。これを捨てることが出来ればこの世から一切の争い、戦争だつて無くなる筈だ。だからこの世を悪くする毒と言ひ、取り去りなさいという声が彼岸から聞こえて来ている。

日本人は儒教から礼節を、仏教から寛容の徳を学んだと言われている。

フロイスが感嘆した日本人は、彼岸からの声を聞く耳を持っていたに違いない。

しかしながら、貧（むさぼりの心）や嗔（怒りの心）を捨てなさい、という声は聞いていても、凡人には取り去ることは容易ではない。どうしたら……。それが課題である。

法然上人は

「念仏にものうき人は、無量の宝を失うべき人なり。念仏にいさみある人は、無辺の悟りを開くべき人なり。相かまえて願往生の心に

て念仏を相續すべきなり」と。

念仏に励めば、必ず悟りを開くことが出来る。すなわち貪も瞋も自分の力によつてではなく、阿弥陀仏の本願力によつて取り除いて下さるのだ、と教えておられるのである。

この教えはまた彼岸からの声でもある。

悟りきるまでには至らなくとも、悟りに近づくことは出来る。近づくに従つて、毒が薄れ、「現世には、よこさまなる煩いなく安穩にして……」と上人は説いておられる。

世事に惑わされて日々を忙しく送っている私達。彼岸からの声を聞き、念仏に励んで春のお彼岸を迎え、また過ごしたいものである。

二、彼岸へ渡るには（七日間の過ごし方）

お彼岸を過ごす心構えとして、以下のよう
に説いている方がある。

彼岸へは六つの川を渡りきらねばならない。

（第一日目） 布施の川

物惜しみ、けちんぼう波が行く手を阻む。

「施そう、施そう、施しまーす」と叫び、誓いながら逆巻く波に打ち勝つて渡ろう。有りて施さざれば、窮してこれを救うものなし、と彼岸から聞こえてくる。

（第二日目） 持戒の川

ふしたら波が行く手を阻む。

「ちゃんとしよう、ちゃんとしよう、ちゃんとしまーす」とさげび、誓いながら逆巻く波に打ち勝つて渡ろう。

ふしたら心は、家庭を乱し、己をも滅ぼすぞ、と彼岸から聞こえてくる。

（第三日目） 忍辱の川（我慢の川）

怒り狂い波が行く手を阻む。

「我慢だ、我慢だ、がまんしまーす」と叫び、誓いながら逆巻く波に打ち勝つて渡ろう。

諸々の侮辱、迫害を忍受して恨みの心を抱くなかれ。いま身に着けている衣服は忍辱の袈裟と思え。この袈裟はあらゆる害毒から身を守る、と彼岸から聞こえてくる。

（第四日目） お中日

仏様に、ご先祖に感謝の誠を捧げる日。修行は一服。

(第五日目) 精進川

怠け波が行く手を阻む。

「頑張ろう、頑張ろう、頑張るまーす」と叫び、誓いながら逆巻く波に打ち勝って渡ろう。悪行を断じ、善行を修め、なすべき事や約束した事は断じて実践する。怠惰になったら信用をなくし、家族から世間から相手にされなくなるぞ、と彼岸から聞こえてくる。

(第六日目) 禪定の川

騒がせ波が行く手を阻む。

「落ち着け、落ち着け、落ちつきまーす」と叫び、誓いながら逆巻く波に打ち勝って渡ろう。

さてという時には、静かに長く息を吐こう。軽率な言葉に慎む。どんな事があっても動揺せず、慎重に対処すれば自ら前途が見えてくる。と彼岸から聞こえて来る。

(第七日目) 智慧の川

慫ろし波が行く手を阻む。

最後の川だ。波は怒涛逆巻く。船が巻き込まれたら、今までの苦労は水の泡となってしまう。

「騙されないぞ、騙されないぞ、騙されませーん」と一段と大きな声で叫び、誓いながら怒涛を乗り切って渡ろう。

甘い言葉には毒がある。忠告は快いものではないが、慈愛の言葉と思ひ耳を傾けよう。何が正しいのか分かってくるぞ、と彼岸からの声が聞こえて来る。

六つの川を渡る、「布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧」のそれぞれをを目指すには、まず念仏が基本となっていることは言うまでもない。

(東京・光取寺住職

本誌編集顧問)

ワンスアボナタイムイン 東京

藤木芳清
(貞源寺住職)

題字・慈古
流

高き尾の
あこ野

その土地を離れて暮らしているが故に懐かしく思えるのが故郷というものだろう。

東京の昔を書く人の多くがそうだったように、私も下町に生まれ育ったわけではない。

下町の方に昔のものを探したり、気風を求めたりするのは、おそらくそこに住んでいない者の身勝手なのだろう。

私はそうしたものを、そこに住んでいる人々に守り続けてくれというつもりはない。時代の流れの中で、消えていくのもまた仕方がないと思う。

ただ、私はマスコミが嬉々として伝えるような「新しいもの」の多くが好きではない。時代の流れの中で、古いものとして捨て去られていく側があるなら、むしろその側に居たいと思う。少なくとも、「新しい」の一言ですべてを顧みることなく捨て去る側には居たくない。

とはいっても、私はそういう動機で下町の方へ行くようになったわけではない。

ただ、子供の頃からその名に馴染んでいる町へ行ってみたりしているうちに、だんだんとそう思う様になったというに過ぎない。

たとえば、神田。

お玉ヶ池の北辰一刀流千葉道場といえは、赤胴鈴之助や天保水滸伝の平手酒造。明神下といえは銭形平次。半七捕物帖の三崎町。

これらはみんな山の下、つまりは下町。

山の上といえは駿河台。私が二十歳前後の頃、山の上にはカルチュエタン通りだとか解放区だとかが在って、そうしたところを好んで集まる人々とは子供の頃から折り合いが悪く、今でもその辺りは馴染みがない。

山の下、小川町近くに「温恭堂」という祖父が馴染みだった筆屋が在って、私は書道は自己流だが、良い筆を買おうというときにはやはりここへ行く。

そこから昭和通りへ歩いて五分ほどのところが神田須田町。靖国通りに面したビル群の

中に、一際目立つ木造二階屋の蕎麦屋、「神田まつや」は、故・池波正太郎さんが馴染みだった店。

私は、池波さんとは、それこそ袖触れ合うほどの縁がある。

私が住職を勤める貞源寺には、『幕末遊撃隊』の主人公伊庭八郎秀頼の墓が在り、池波さんが取材に見えた折りに、ご挨拶だけさせていただいた。

江戸侍の代表として、勝小吉を主人公に『父子鷹』を書かれた子母沢寛さんも、伊庭八郎を心から愛しておられたということだが、池波正太郎さんは、この伊庭八郎を、江戸侍の代表と考えておられたようだ。

後の『戦国と幕末』にこう書いておられる。「これまで私が書いてきた小説の主人公の中でも、もっとも好きな男である」と。

池波正太郎さんは、江戸っ子の血を引く最後の作家だったと思う。

神田は、増上寺への行き帰りの道筋に当た



るため、「神田まつや」は今ではいきつけの店となったが、池波さんがご存命の間は、何となく敷居が高いように思われ、一度も店に入ったことがなかった。

時分どきの喧噪の名残が漂う中で、独りで蕎麦湯を飲んでいると、ふとそこに池波さんの気配を感じるときがある。

本郷菊坂といえば、大正ロマンの代名詞、菊富士ホテルが在ったところとして名高い。

だが、私には、かつて樋口一葉が住んだところ。鍋木清方の絵を見てから、一葉は、私の好きな女性の一人になった。

以前、一葉を偲んで本郷の菊坂を歩いてみて、一葉が使ったであろう井戸から水を飲んでみたことがある。実に不味い水なのだが、母の生家である越谷の寺でかつて使っていた井戸の水と同じ味がした。

菊坂から言問通りに出て、本郷通りの方へ歩いていくと、右手に木造三階建ての下宿屋

「本郷館」が見える。更に本郷通りの方へ行くと、右に、藍色木綿に白く「三代目藪蓐」と染め抜いた暖簾の蕎麦屋が在る。

店内は、一間四方の土間と左手にその倍程の座敷。出前もするどこの町にでも在るような蕎麦屋だが、糸のように細い蕎麦も、醤油の立つた鰹出汁のツユも、昔通りの東京の味。家内などは、

「お揚げが美味しいきつねなんか減多にないわね」

などと妙な褒め方をする。

白山下、東洋大学前に在る、挽きたて・打ちたて・ゆでたての「三たて」が売り物の、客の注文を聞いてから蕎麦を打つ「藪蓐」とは、若干の縁があると聞いている。

白山上、文京区千駄木に在る駒込高校は私の母校。山手線の駒込駅から白山上まで、毎朝本郷通りを都電で通っていたが、帰りは徒歩で根岸から上野、あるいは谷中の墓地を抜

けて日暮里、気が向けば浅草まで、あるいは都電で神田明神、ともかく真つ直ぐに帰るということはなかった。

高校から谷中の方へ行くと、不忍通りに降りる汐見坂の手前に、かつて森鷗外の「観潮楼」が在った。後に夏目漱石も住んだその家は、現在は犬山の明治村に移築され保存されていて、そのあとに、「森鷗外記念図書館」という小さな図書館が建っている。

私が高校生だった頃、この小ぢんまりとした図書館は、都立向丘高校の女生徒が良く利用していて、彼女たちと知り合いになれるかも知れないという淡い下心と共に、何となく懐かしく思われる。

この図書館の斜向に在る「巴屋」は、高校在学中にも在ったのかどうか憶えてはいないが、石臼挽きの粉を使った、色白の、細く綺麗な蕎麦を出す、この界限で一番好きな蕎麦屋だ。

余談だが、汐見坂と交又する団子坂は江戸

川乱歩の『D坂殺人事件』のD坂。そのD坂を下って不忍通りの向う、三崎坂の途中に「乱歩」という喫茶店が在る。

私の父は浅草で生まれた。

関東大震災により現在地の中野に移転したため、幼児の頃のほんの一時しか住んで居なかったのだが、やはり懐かしかったのだろう、祖父が健在の頃、私をダシにして浅草へ行っていたようだ。祖父は私が小学校三年の時に亡くなっているから、それは私が十歳になる前のことだったはずだが、花屋敷の観覧車から増上寺が見えたこと、陽が落ちるとアセチレンガスの丸い炎が六区を幻想的に照らしていたこと、新世界や寿司屋横町など、部分的にはあるが鮮明に記憶している。

そのせいか、浅草で生まれ育ったわけでもないのに、私は浅草が妙に懐かしい。

そこには好きな食物屋が数多く在るが、浅草六区の周辺には何故か好きな蕎麦屋は無い。

決して蕎麦が不味いわけではない。有名な「並木藪蕎麦」は観光バスが止まる、雷門通り沿いの「尾張屋」は浅草寺帰りのご婦人達で騒々しい、食通街の「東向島寺方蕎麦長浦」の支店のおばさんはいつも機嫌が悪いそうである、国際通り沿いの「松月」は場外馬券場の客が占領していることが多い、「十和田」のショーケースはデパートのお好み食堂みたいだ。と、いうわけで、結局私の我儘なのだが、どうしてもというとき以外は、六区の周辺から離れることが多い。

国際通りを言問通りから更に行くと、驚神社が在り、その先、樋口一葉記念館の方へ曲がる交差点のそばに在る茶色いビルの一階に、「角萬」という大きな看板が見える。

この店の蕎麦の量の多さは特筆もので、初めて行ったらまず普通盛りにした方がいい。もう蕎麦の大盛りなどたのもうものなら、蒸籠の上に富士山の模型を乗せたのではないかというほどの蕎麦が出てくる。それを近所

のおばさんがべろりと喰ったりするのだから体を使って仕事をしている人達には適わない。熱い蕎麦などは、ゆっくりと食べていると下の方がのびてくるから、何時まで経っても量が減らないということになる。

ここで、ファミリーレストランのように構えていると、何時までも注文できないことになる。入口を入ると同時に正面の品書きを見て、座ろうとする席に付く前に注文するのが正しい。馴染みの客は、「冷や肉」などと注文しながら店に入ってくる。

どういう訳か、客の大部分は、肉蕎麦の熱いものか冷たいものをたのむ。

国際通りを更に進むと、明治通りとの交差点、大関横町。ここから先は日光街道になる。交差点の右奥には、吉原で死んだ女郎が運び込まれたことから「投げ込み寺」の通称がある浄閑寺が在る。ここは永井荷風の墓が在ることでも知られている。

日光街道に面した反対側には、幕末の上野戦争の折、幕府軍の戦死者の遺体を官軍の兵士が好き勝手に切り刻んだりして腐敗していくのを見かねた、神田旅籠町の侠客三河屋幸三郎が、その屍を集めて埋葬した円通寺が在る。同時に移築された黒門が、上野戦争の有り様を今に伝えている。

その円通寺の脇に在るアーケードの商店街の中段に、直系百六十余軒を誇る「砂場」の総本店が、古色蒼然と佇んでいる。

かつては芝巴町に在ったことを、店内に掲示された移転許可証のコピーが物語る。

色白で腰のある、玉子つなぎのきりつとした蕎麦は、由緒正しい砂場流。

もりは勿論、香り高い揚げ玉の入った「たぬきそば」も、私は好きだ。

白髭橋を渡るとそこは滝田ゆう『寺島町奇譚』の舞台。その寺島町もとくに墨田と名を変え、少し前まで「玉の井」だった駅名も



今は「向島」、永井荷風の『濯東綺譚』を偲ほうにもその術は無い。

そういう駅で、水戸街道沿いに在る、大根の千切りと蕎麦を和え、味噌をすり込んだつけ汁で食べる「妙興寺そば」の旨い「寺方蕎麦」「長浦」は割と好きな蕎麦屋なのだが、この辺りに来る機会があまり無いのが残念だ。

隅田川に沿ってずうっと下ると、明治四十四年五月、柴田流星が『残されたる江戸』で、「江戸っ児の文明は大川一つ向岸に追いやられて、とうとう本所深川の片隅に押込められてしまった。然らばすなわち、今の東京に江戸趣味は殆ど全く滅ばしつくされたろうか。いいえさ、まだ搜しさいすりや随分見つけ出すことが出来まさらね」そう書いた本所深川。

清澄庭園近くの「深川江戸資料館」の中に、その本所深川の片隅が残されている。

この辺りへ来ると必ず寄る店が、清澄庭園

正門前に在る「尾張屋」だ。

「伝統のある老舗は可哀想だね。俺なんか脱サラの初代だから何でもやっちゃうんだ」

そういう主人の言葉通り、納豆蕎麦からカレーライスやすき焼き井、果ては鰯フライ定食まである。客も客で、カレーライスにもり蕎麦なんていう乱暴なことをする。

それが嫌みに見えないところがこの店の取り柄。勿論、肝心の蕎麦が旨いからこそ思えることなのだ。

ざっと駆け足で一巡りしてみたが、まだまだ書き残した店がいっぱい在る。

それなりの歴史を持った料理は何でもそうなのだが、その料理が要求する食べ方というものがある。

それを知り、それを受け入れさえすれば、その料理を求め、支持してきた人々の好みが自然と理解できるようになる。

今の東京の蕎麦が江戸以来の伝統を継いで

いるかどうか、それはわからない。

しかし、少なくとも私の祖父が食べたであろう蕎麦を、偲ぶ程度のことは出来る。想像力を働かせれば、落語の「蕎麦の羽織」に登場するそば清も、「時そば」の情景も浮かんでくる。

もし、浅草の「並木藪蕎麦」で抜きで一杯やっている古今亭志ん朝に出会ったら、その風情は、どれくらい昔を感じさせるだろうか。昭和十三年生まれの彼は、鰻が自分の守り本尊、虚空蔵菩薩のお使い姫だと知ってから、大好きな鰻を断ったという。

笑ってしまうかも知れないが、こういう気分が江戸の、いや日本人の精神の根本であり、宗教心の根本なのではないだろうか。

私が子供の頃、そういう人が大勢居たし、今でも決して居ないわけではない。

ただ、同じような心を持たないものには見えないだけなのだ。

Once upon a time in Tokyo

ワンス・アボナ・タイム・イン・トウキョウ

どんなに「今」のことを書いてみても、読者が接する頃には既に過去のこと。



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウォッチング、紀行文その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。

どしどし編集部にお寄せ下さい。

提案

「痴呆症」を別名に



中西泰代（長野）

高齢化社会を迎え、老人介護はすべての人が直面する社会問題になりつつあります。平成七年度の推計では、全国で「痴呆症」と言われる老人は百二十六万人おり、十年後にはその六割増ぐらいに増加すると予想されているそうです。

私もアルツハイマー型痴呆症という病名の老人の介護をしてきましたが、一番困ったことの一つは病気そのものが一般に理解されていないことに加え、痴呆症という病名が人格が劣化した印象を与えるため、病人について公表、説明するのがはばかられる場合が多かったことです。痴呆症は脳細胞の死滅により知能が落ちてくる病気で人格の高低とは関係がありません。問題行動と言われるような症状も、幼な子に接するように愛情をもって適切な対応をすれば、

なくなることが多いのです。本人と家族の人権、社会的名誉を考えると、問題のある病名ではないかと思います。

一般に誤解されやすく、病状を正確に表わしているとは言えないこの病名をもっと別の新しい病名に変えるよう、医療関係者にお願したいと思います。

病名が変わった実例としては、「アルコール中毒症」が今では国際的に「アルコール依存症」になっています。本人の人格の問題ではなくて、病気であり治療すれば治ることがわかってきたからです。

アルツハイマー症に関しては、現在原因も治療法も不明ですが、的確な病名になるだけでも、療養の指針がたち、本人と家族がより楽に、この病気につき合っていけるのではないのでしょうか。

冬

誌上投句

鬼打ちの豆勇ましく闇を切る

ぶり大根鍋のたぎりに地獄みて

面とればやさしき鬼の節分会

葬に向ふ車窓に舞ひし春の雪

八十路なほときめきのあり賀状待つ

春立つ日何かよき事ある思ひ

早春のロープウェイに子をあやす

春浅き鷗のこゑに眼を向けり

児玉良男（静岡）

吉田ゆきゑ（東京）

佐藤みつ江（群馬）

児玉仁良（埼玉）

誌 上 歌 壇

彼岸へ

蓮門小子（東京）

青年は黙すにあらず胸に棲む鳥の羽搏き伝えんがため

握る掌の汗輝いて広げつつやがて合わさる二つ合わさる

糸を噛み切る白き歯よ吊いのち生きること生きてゆくこと

逆光のなか並びゆく僧衣へと届けたしこの激しき欣求

薄明のへ信へに凭れて待つ門に少年僧と犬駆け戻る

無量なる教えの庭を樹々深く千年の音一行の声

※

古き花舗ゆるりと人を呼び戻し彼岸の空は清涼である

ちゃんばらと

芸術

蓮門読書小僧（東京）

東京ローカルのTV局に「何でも鑑定団」という番組があつて、どうも人気があるらしいというので観た。「お宝拝見」などといって視聴者の何組かが、その家に伝わる逸品らしき物を持ってきて専門家がそれを鑑定して値をつける。値がついても売るわけではないらしいから一応他愛ないお遊びであり、「本物」と思つて大事に取つておいた物が「真つ赤な偽物」だったり、あるいはその逆だったりして、鑑定結果のときの落胆と喜びの表情が面白い、ともいえるのだが（勿論それが人気の理由なのだが）観終わつて妙に気が滅入つてゐることに気づいた。少し考えて理由はすぐに解明した。要するにレギュラー陣の顔つきが何とも卑しいのだ。物を蒐集したりその蒐

集家相手に商売をしている人間の顔だから本来それまでのこと、ともいえる。すなわち物にこだわる、執着する人々の顔に気品など当然漂うわけはないじやないか、楽しめばいいのさと反論されるかもしれない。しかし戦後の日本人の顔つきは多かれ少なかれ彼らに似ているのではないか、という指摘にはそう無頓着ではない。この番組にも面白ところがあるとするば、それは私たちの戦後のいわば「イデオロギー暴露」を無自覚にし遂げているためなのだ。

ところで、本の世界にも古本市で高値がつく稀覯本という代物がある。読みたい本なのに読めない。そこで、そういった本を復刻する出版社が発生する。これが偉い。復刻は蒐集家や故買商にとつてどうも面白くないらしい。要するに彼らにとつての価値がないのである。ところで読書家にとつては、これは有難い。ザマア見ろといいたくなる。大井廣介の「ちゃんばら藝術史」（深夜叢書）復刻もそ

のひとつだ。俳優の佐藤慶の努力で、ディレクターの極みともいふべき本になった。

人に媚びたり値踏みしたりする卑しさとは無縁の著者の面目躍如。一方で小説の神様といわれた志賀直哉をケチヨンケチヨンに貶したかと思ふと、白井喬二の「富士に立つ影」をドストエフスキーと大真面目に比較する。

大河内伝次郎も目玉の松ちゃんも、勿論阪妻、澤田正二郎、月形龍之介、マキノ省三、衣笠貞之助、つまり剣劇とロシアの文豪も一緒にして豪快、自在に書く。

「ちゃんばらと藝術」とはよくいった。世の中本物も偽物もありやしない。大事なものはたつたひとつ、自分の知性と感性を貫く直観なのだ。値は他人につけて貰うものではない。自分でつける。

一介の読書小僧として私は、大井廣介のよき高い知性と、おっとりとした品位を、私たちはもう一度取り戻すべきなのではないかとあえて言いたい。

V 読 O 者 I の C 声 E

●保母の仕事を経て家にいることの多くな
った私は浄土を毎月楽しみにしています。昨
年10月からの巻頭連載、藤堂先生のお文に心
打たれ感動しています。11月号の「四月二日
から始まる……」のお文にはすっかり嬉しく
なっていました。実はH8・4/3私達
青森教区寺院婦人のお舞奉納させて頂くので
す。10月からお稽古(特訓です)呼吸を合わ
せて励んでいます。

山内俊子(青森)

■心温まるお手紙、有り難うござい
ます。お子様の修練道場入山のこと
また、お十夜の御準備のご様子など
目に見えるようです。春の増上寺、
楽しみですね。編集部一同、是非
拝見させていただきます。

●11月号下部匡信上人の御文章は引用もよ
かったこともあり一段と光っておりました。
表紙いいのですが紙質を変えて下さい。く
るくるとめくれ上がってしまい、しつとりと
おちつかないのです。希望としては対談をと
きどき企画してください。有名人(スターな
ど)でなくとも……地方での講演会や説法の
会があってもいいと思います。お寺だけでは
なく市民センターとか、もっと小さなところ
でも。

長谷川光雅(白井町)

■二指摘、まことに感じ入ります。
表紙は紙質、デザインとも大きく変
わりましたが、造本上の理由で極端
に薄くはできないのが残念です。
熱心な読者の方々のために、読面

の充実を心掛けていくつもりです。

対談という形にはなりません。で
したが仏教の泰斗、中村元先生のイ
ンタビュー如何だったでしょうか。

3月9日、午後2時より新宿太宗
寺で公開講座を開催します。いずれ
地方でも臨機応変、様々な形で開催
を企画できるよう御指示下さい。

●浄土読、毎月楽しく拝見しています。誤字
の反省文、身にしみています。面白くて真剣な
お詫びに微笑しました。吉田ゆきあ(東京)

■こちらこそ俳句をいつも楽しみに
受け取っております。その方のお優
しいお言葉に何と感謝したらいいの
か。感激で言葉になります。

京都一千年の歴史に

育まれた巧みの技

京仏壇・佛具は当店に!!

〒六二五 京都市右京区

西京極南衣手町七四

(株)島津法衣佛具店

☎〇七五—三一四—七七六八

FAX〇七五—三一五—三七五三

●読者アンケートのお願い

編集部では「浄土」のより一層の充実を図るために、皆様にアンケートをお願いしております。

1 三月号でもっともよかった記事。

2 今後、掲載してもらいたい記事、希望する内容。

3 法然上人讃仰会の活動として望むこと。

4 その他、ご意見、ご感想など。官製はがきまたはFAXで事務局までお送り下さい。もれなく記念品を差し上げます。どうぞご協力お願いします。

(住所、氏名、電話番号をお忘れなく)

●新規会員紹介(敬称略、順不同)

一般会員

東京 中野区 貞源寺

購読会員

群馬 前橋市 滝沢 靈秀

京都 北区 藤野金二郎

東京 墨田区 山田 トク

〈セミナー〉

『都市寺院をどう開くか』

——みんなが集まる21世紀のお寺を考える——

〈日時〉 3月25日(月曜日) 午後1時開場

〈場所〉 浄土宗大本山 増上寺 地下1階 三縁ホール

〈参加費〉 1,000円

〈プログラム〉 ・実践報告 真言宗・日蓮宗・浄土真宗・浄土宗

・基調講演「開く宗教」井上順孝 国学院大学教授

・トークセッション「寺はどう開く」枅野俊明 校條 諭

梶田真章/武田道生

浄土宗東京教区青年会/教化情報センター21の会 共催

〈問合先〉 浄土宗東京教区青年会 03-3872-2356 (事務局 英信寺嘉藤哲也)

公開講座のお知らせ

念佛に生きる私共の日頃の諸疑問、信念、意見等、情報を交換し、
会員相互の信交を深めてまいりたいと存じます。

つきましては、何かとご多忙のこととは存じますが、僧俗の別なく情熱をお持ちの方は、お誘い合わせの上、多数ご参加下さいますようご案内申し上げます。

記

日 時 平成8年3月9日(土) 午後2時より

会 場 新宿太宗寺(地下鉄丸の内線 新宿御苑前)

東京都新宿区新宿2-9-2

電話03(3356)7731

内 容 別時念佛会

講演「生前葬儀と人前結婚式」

大室了皓先生(東京教区長 月刊「浄土」編集顧問)

情報交換

参加費 無料

服 装 特定しませんが、念珠、輪袈裟をお持ちの方はご持参ください。

◎なお、定員に限りがございますのでお早めに事務局まで葉書かFAXでお申し込み下さい。

法然上人鑽仰会事務局

港区芝公園4-7-4

電 話03-3578-6947

F A X 03-3578-7036

協賛 城西組教化団・青年会 協力 太宗寺



生きているそれがうれしく供華の墓 岱潤

昨年私の高校の同期の者が、九死に一生を二度味わった男としてテレビに出た。つまり一月に神戸で地震に遭い、出張から戻った三月東京の地下鉄でサリンに遭ってしまった、極めて運の悪い男だと思った。しかしその男は、自分は実に運がいい男なのだと言っていた。運がいいからこそ、こんな大事件に二度も遭っているのに、怪我や入院だけで済み、死ぬことがなかったからだと言うのである。

今月の執筆者の一人、斎藤耕善師は、やはり九死に一生を二度味わった経験の持ち主である。一度は第二次大戦中フィリピンで戦闘で、もう一度は昭和五十六年に胃ガンの手術をされたことである。上人はそのことを実に淡々と語られ、特別触れようともされないが、その時に覚悟した精神は、上人の人に対する優しさに現れている。「経験は人を優しくする」という言葉があつたか無かつたか忘れたが、死を覚悟し、死を考えた経験を持つ人の、強さ優しさを強く感じさせられた。お彼岸に入ると、我が寺の墓地もいっせいに花園と化す。色あてやかな供華の花園である。美しい花を墓前に捧げるのは、ネアンデルタール人の時代、今から4万五千年も昔から行われていたことが、その墓を発掘して分かっている。いつの時代も美しい花は、人の心を美しくしてくれるようだ。(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤光道

編集協力

村田洋一
太田正孝
石上俊教
オフィス顧問代表佐山哲郎

編集顧問

大室了晴

浄土

六十三巻三月号 頒価六百円
年間費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可
印刷——平成八年二月二十五日
発行——平成八年三月一日

編集人——宮林昭彦

発行人——牧田諦亮

印刷所——株式会社 平文社

写真植字——株式会社 シーティイー

〒一〇五 東京都港区芝公園四十七四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話〇三(三五七八)六九四七
FAX〇三(三五七八)七〇三六



使えるよなあ、こいつ。



こんどのバルサーは、 たのしい新実用主義。

○ いろんな機能性、ヨロコビがあるのが新しいのだ。それが、
○ こんどのバルサーのたのしい新実用主義。しっかり遊ぶ、
○ しっかり仕事する。しっかり生活する。Mr.しっかりのこれからを、
○ 気持ちよくサポートします。

これ安心

■運転席SRSエアバッグ
システム全車標準装備。



走る走る

●新車、マルチリンクビームマスペンション(リヤ)
●うれしい低燃費(1500X1(5速フロアシフト)
18.2km/ℓ、1500REZZO(4速オートマ)
フロアシフト)18.8km/ℓ、10-15モード燃費
(道路運送車両法)

らくちん

●足踏板のある、しなやかな乗りこころ。
●ゆったり置内スペース。

ツイてる

●新型エアコン。
●トランク、ポケット等、収納性じゅうぶん。

バルサー4ドアセダン
1500CJ(15速フロアシフト)

131.3万円

バルサー4ドアセダン
1500X1(15速フロアシフト)

148.4万円

上記価格にはメーカーオプション(ナビゲーションシステム)12.1万円(税別)が別途必要となります。

上記価格はいずれも全国メーカー希望小売価格(税別・定価)です。

Mr. しっかり 新バルサー誕生

[Mr.しっかり] 日常ファン活用、①新バルサーの別名。②新バルサーに乗る人の愛称。
③～状態……新バルサーでたのしい人生を送っている様子。

●PHOTO: バルサー4ドアセダン(1500X1)、ボディカラーはブルーインディゴパールM(※K01)、スポーツパッケージは
メーカーオプション。●希望小売価格はスペアタイヤ・標準工具付。車検代は別途1.7万円とします。●保険料、
税金(消費税含む)、登録等に付く諸費用は別途申し受けます。●希望小売価格は参考価格です。価格は販売会社が
独自に決めていますのでそれぞれの販売会社にお問い合わせください。●日産自動車お客様相談室 全国共通
フリーダイヤル 0120-315-232 ●お求めは、お近くのスカイライン、ブルーバード、日産サニー各販売会社へ。



みんな、自分の星を追いかけている。

駆けぬける 喉ごし。

息もつかせぬ爽快感。おいしいビールは、
喉をまっすぐに走ります。胸に一本の滝をつくります。
やすらぎと勇気をあたえてくれるもの。あなたの金星、黒ラベル。

サッポロ〈生〉黒ラベル



ビールは、20歳になってから。あきかんはリサイクルへ



ご協力をお願いします。詳細は各自治体の資源物回収センターまたは各自治体のホームページをご覧ください。

サッポロビール株式会社